
春風千桜！inゲーセン!!

dandyy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春風千桜！ いのゲーセン！！

【ZIPアーカイブ】

N1635L

【作者名】

dandy

【あらすじ】

本当は「ハヤテの」「とく！」～Combat Butler S
tory～「275話前後に挿入するつもりでした…

(前書き)

あらすじの解説

いやあぶつけ本編のつもりで書いてたら「なんかあんま流れに乗つてないな」と感じ一になっちゃいました。ま…いつも流れなんかないんですけど。思うのは…6分前後の話を作る方が向いてるかもしれませんね。長編はなんか…途中から意図のわからない話がありますからね。くう

で、肝心の内容は…まあ駄作だけど消すのは惜しかったのです。s a i k y o l i n e の中で満員電車でもみくちゃにされながら書き35分を要しました。35分で6分しか書けない効率の悪さ。だがしかしーーー作品の良さは時間と比例しないことを証明…でき…たら…竜頭蛇尾

彼女はストレスを溜めに溜めまくっていた。学校では規律を重んじ学院内を取り仕切る生徒会役員。かたや弾ける笑顔でお客を魅了するメイドさん。真逆の性格操る彼女 春風千桜。無理はしていいない。どちらもあるべき彼女の姿。そんな彼女を苦しめるのは誰にも知られたくないという秘密主義。油断すれば正体がばれかねない。

(我ながらなんと不自由な性格なんだろ(…))

千桜は帰宅途中だった。だがまっすぐ家には帰らない。溜めたストレスを発散するため彼女は行きつけのゲームセンターに寄つたのだ。この日も理事長キリ力に散々振り回され混乱する生徒を落ち着かせることから1日が始まったのだからストレスも溜まるだろう。早速ショーティングゲームをやるためにコインを入れた。

ゲームを始めてから何分か経つた後千桜は諦めた。調子が悪くスコアが伸ばせない。

(今日は厄日だな…)

ただただ疲れた。さらに追い討ちをかけるかのように財布の口がわずかに開いていたようで100円玉が一枚落ちた。コロコロ転がりゲーム台の下に吸い込まれた。千桜のテンションはいよいよ最悪に。

(…死のう)

本当に死ぬわけはない。だがたった一枚の100円玉のために誰か

呼ぶのも情けないと思ひ一〇〇円のレジは戻れようとした。

(チャリティーだ。チャリティー。もしくは小さな幸せを私は与えたんだ。あのゲーム台が撤去される時に下から100円が見つかれば嬉しいじゃないか)

「つでも思わなければ自我を保てなかつた。だがこのままみすみす帰るわけにはいかない。

(いらっしゃんでもこんな気分のまま帰るわけには…)

半ば自棄になつていった。札を両替しゲームに挑む。どれも何かを得られるゲームではない。千桜は戦つた。ハイスクアという見えざる敵と。

だが惨敗を極めた。どのゲームをやっても勝てない。勝てないいらだちがさらに千桜を自棄にさせそれがさらに敗けを誘発する。負のスパイラルは止まらない。誰か他にいれば歯止めも効くが止めるのは千桜自身。さすがに破産するのはよくないと思いゲーセン前の自販機でジュースを買い隣のベンチに座つた。

(ついてない…。いや、なんか憑いてるな。靈的なものが)

千桜はジュースを飲み終わつたら帰ろうと決めた。いつまでもここにでは 次こそは という期待をしてしまつのではと思ったからだ。しかも破産寸前。だが千桜にとつて今日は本当に厄日だったのかもしれない。

「あら、千桜さんじゃありませんか」

「あ……愛歌さん？」

たまたま今日に限ってゲーセンのある道を通った愛歌がやって来た。本当にたまたま。たまたま千桜が休んでいた時間帯に通りかかったのだ。

「愛歌さん。どうしてここに？」

「いえ……たいした理由はないのですけど……。あ もしかしてゲームですか？」

愛歌はゲーセンの存在に気が付いたらしい

「たまたまひこうのものこいかもしませんね。千桜さん。ちよつとやつてこきません?」

「ゴホッ！」

ジューースが変な器官に入り千桜は噎せた。千桜は焦る。もつそんな金はない。しかし

「今日はゲーセンで破産しそうなので遠慮します」

とは言えなかつた。ゲーセン自体普段の千桜のイメージではないし破産寸前など知れたら愛歌に何を言われるかわからぬ。

(あくまで……あくまで生徒会書記春風千桜としてのイメージを…)

結局千桜は

「いこですよ。付合こまへ

と返事をしてしまった。

「やつですか。じゃあ行きましょ」

意気揚々と愛歌がゲーセンに入る中千桜は 言いつてしまつた と頭
が痛くなる。

しかし神様の悪戯か千桜は別人のようにゲームに興じた。さつきまで何をやってもダメだったが信じられないくらい調子がいいのだ。
隣で見ていた愛歌も思わず感心した。

「すういですね千桜さん。まるで熟練者の域じゃないですか
「ええ…まあ」

千桜は苦笑する。実際熟練者なのが今まで以上にうまくこつたため氣味が悪かつた。

「しかし愛歌さんはやらないんですか?」
「私はダメね。一回やつたけど…千桜さんのを見ていろはうが楽し
いです」

それでは困る。千桜は思つた。なんせなけなしの金を使つているのだから。かといってよつやくHンジンがかかつてきたのにやめるのはもつたいなかつた。

「愛歌さん…世の中ひつまくできちますね」

「え?なんですか?」

「いえ、なんでも。」ひちの話です」

「いえ、なんでも。」ひちの話です」

シユーティングゲームを終え千桜は銃を元の場所に戻した。いつの間にかゲーセンに来てから1時間弱経っていた。愛歌が来てからは10分程だが。

「帰ります？ 愛歌さん」

「えつ？ もういいんですか？」

「私ばかりやるのも悪いので」

「千桜さんがやつ言うなら止めませんけど…」

千桜はようやく帰れると解放感に包まれた。財布の中はほほ空っぽ。本当のことを言えばよかつたのかもと後悔もしていた。

（ゲームで溜めたストレスを発散できたのはよかつたけど…ゲームで溜めたストレスはゲームでしか発散できないということだろうか…）

空っぽの財布を見て千桜は思つた。じつと財布を見つめる千桜を愛歌は不思議そうに見ている。

「どうしました？」

「いえ…」

「もしかしてお金がもう底を尽きそうだつたけど私に誘われたから無理にゲームをしたとか…？」

千桜は声が出なかつた。完璧に心理を当てられてむしろ怖くなつたのだ。

「当たりですね」

愛歌は笑った。その笑顔に対しても千桜は何も言葉が浮かばない。呆気に取られていると愛歌が自分の財布から100円玉を一枚千桜に差し出す。千桜は驚いた。

「なんですか愛歌さん…」

「なにして…千桜さんにあげます」

「べ、別に気を遣わなくても…私がやりたくてやつたんですから」「でも…あの負けず嫌いの人を止めてくれるなら安いものよ」

「へ?」

愛歌は ほり と直わんばかりに指差した。その先には何の因果か頬を思いつきり膨らませながら FOFICOキヤツチャーをする生徒会長桂ヒナギクの姿があつた。

「あれ…会長ですよね？」

「さっきからずーっとあの場所を占領してゐみたいだし…あのままじやこFOFICOキヤツチャーが貯金箱になってしまいますから千桜さん、止めてあげてください」

「止める…？」

「そのための100円ですから」

千桜も愛歌の意図がわかつたようで100円玉を受け取りヒナギクに後ろから近づく。丁度ぬいぐるみがアームから落ちヒナギクも気持ちしている時だった。

「会長」

「…え…? ハル子に愛歌さん…?」

「ほお。FOFICOキヤツチャーですか」

「み…見てたの?」

「まあ一部だけ愛歌さんが

千桜はキラリと眼鏡を光らせ愛歌はひたすら笑顔。ヒナギクは一気に恥ずかしくなる。

「い…言わないでよね」

「言いませんよ。それより一体何が欲しかったなんですか？」

無言のままヒナギクは中にあるぬいぐるみを指差した。何を狙つていたかは各々の想像にお任せ。

「あれを？」

「ええ。だけどもういいわ。もつ無理だし…」

「ちょっと失礼」

千桜はヒナギクがいた場所に立ちそしてまるで獣が獲物を襲うかの如くものすごい剣幕でぬいぐるみを見つめ台を横から見たりした。

「あの…ハル子？」

「…でございます」

100円を投入しボタンをプッシュ。その目はぬいぐるみただ一点のみを見ている。千桜は取れる気しかしなかった。適当な場所にてアームを降ろす。

(きた!)

千桜の操作は完璧だった。面白いくらいにぬいぐるみがアームにかかり一気に運ばれ穴に落ちた。横で見ていたヒナギクは素直に喜ぶ。

「す…すごい！ありがとうハル子！」

「いえ… 私だけではあつません。余長と愛歌さん… 一人のお陰です

千桜は感慨深げに言ひへ。

「うへこへ口も悪くない

千桜の気持ちはよつやく晴れた。

(後書き)

綺麗にまとめた感80%。結局生徒会重役三人娘の話になってしまいさらに言えば1期48話のヒナさんのイメージがずう一つと頭の中に残像として残つてしまつこいくらいです

ゲーセンで破産した知人をたくさん知つてます。カードをスキヤンして戦うゲームでレアカード欲しさにみんな大金叩いてました。それに私自身も…

ゲーセンはほどほどにやれば楽しいけど節度を守らないと破滅します。酒?とりあえずゲーセン中毒にならないようみなさんもお気をつけください

次はハルさん視点で書くのも楽しいかなあと思つてますがまあしばらく無理でしょ。今はGW(後から見たら季節感0だな)ゲームしてアニメ見て本読んで課題クリアしてバイトして…あれ?これGWなのか?

G…外界には行かない

W…私です

読んでいただきありがとうございました!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1635/>

春風千桜！inゲーセン!!

2010年10月21日20時22分発行